

ニホンナシの新品種‘多摩’について

芦 川 孝三郎

New Japanese Pear Variety ‘Tama’
Kōzaburō ASHIKAWA

Summary

‘Tama’ was selected in 1971 from the hybrid seedlings between ‘Gion’ and ‘Kōsui’ crossed in 1963.

Tree is moderately vigorous, healthy and rather open in growth habit.

‘Tama’ has viable female and male gametes, yet there is cross-incompatibility between ‘Tama’ and other varieties, that is, ‘Kōsui’ and ‘Sinsui’ are cross-incompatible with ‘Tama’.

However ‘Nijusseiki Chōjurō’ and ‘Hōsui’ etc., are fully compatible with ‘Tama’.

‘Tama’ ripens early in Japanese pear maturity

season. The fruits ripen in early to late August at Tachikawa JAPAN.

They are large in size for fruits of the earlier-ripening variety, about 300 g in weight, and skin color are light brown.

Sugar content of the flesh is as high as 12 to 13 in brix index.

‘Tama’ certainly has ‘Kōsui’ blood in it, as the shape of fruit and the quality of flesh testify, while the robust leaves and the habit of bearing flower buds approach to ‘Gion’.

緒 言

ニホンナシの需要は次第に早い時期に移行しつつあり、早生の優良種を待望する声が非常に強くなってきている。しかし従来の早生品種はややもすると品質のおとるものが多く、また品質の優良な品種は、果実の発育等の点で不満な場合が多い。そこで品質がすぐれていて、しかも玉太りの良い早生品種の育成をめざして交配の両親を選択し、改良につとめた結果、早生品種としては優良と思われる新品種を育成することができたので、ここに報告する。本報告を公表するにあたり、終始本研究の遂行について激励と鞭撻を賜った当場の本橋精一場長、山崎正枝前場長、研究実施上長期間にわたり協力を願った栽培部果樹研究室土方 智主任研究員、川俣恵利主事始め室員および研究生各位に厚く御礼申し上げる。

1. 育成の経過

‘多摩’は祇園に幸水を交配した実生中から選抜育成したものである。(交配年次 1963 年, 結実段階まで育成調査したものは 22 個体) 母親に祇園 (二十世紀×長十郎) を選んだ理由は、この品種が現在のニホンナシ中で最も強健な葉を有し、花芽の着生も容易で、栽培性の点において非常にすぐれているからである。東京都下のように、ケヤキが不時落葉をおこすほど大気汚染が進行した地域においては、葉の強健なことが今後とくに重要な条

件になるものと思われる。参考までに当場で栽培中の各品種の葉色の濃淡を調査した成績を示すと第 1 表のとおりである。葉色の濃淡が直ちに大気汚染に対する抵抗性の強弱を表わしているとは軽率に断定できないが、清浄な環境下におかれている他産地のナシと比較観察してみると、やはり葉色の变化や不時落葉等と大気汚染との間には、何らかの関連が存在するものと考えざるを得ないのである。

父親に幸水 (菊水×早生幸蔵) を選んだのは、いうま

第 1 表 ナシ各品種の葉色の濃淡 (1972 年 9 月)

程 度		別 葉 色			
I	II	III	IV		
‘多摩’	稲城	早玉	ドイツ	幸水	72-1
真鍮	伊豆の誉	水秀	豊水	北海早生	久保
石井早生	愛宕	八雲	30-22	新清豊	
雲井	92-7	新水	土佐錦		
新世紀	清玉	42-6	晩三吉		
祇園	ヤーリー	八	幸吉野		
青竜	千両	旭			
松島	新高	相模			
二宮白梨	ツリー	二十世紀			
長十郎		菊水			

(注) I → IV
(濃) (淡)

でもなく現在のニホンナシの中で、その果実が最高の品質を有しているからである。この両者の長所を結びつけようと意図したのであるが、不十分なながらある程度までそのねらいを達成することができたものと考えている。
 ‘多摩’は1968年に初結実したが、当初から有望な特性を示していたので、1970、1971の両年にわたり試食会を開いて、都下当業者幹部の意見を求めてみた。その結果が極めて好評であったので、試作年数が短かすぎとは思ったが、管内のナシ栽培の情勢等を判断した上で、1971年8月命名発表にふみ切った次第である。命名の由来は東京都下のナシ産地、多摩川、多摩湖両地域にちなんだものである。

2. 特 性

(1) 樹 性 樹勢はやや強く、樹姿はやや開張性で、伸長力は旺盛である。枝はやや細く発生密度は中位で、最初トゲが出ることもあるが、これは実生してからの年次が浅いため、年数を経過すればもちろん発生しなくなる。花芽の着生は良好で、腋花芽も若干発生する。短果枝の形成は容易である。葉はやや厚くて細長く濃緑色を呈していて、極めて健康である。しかし高温乾燥が続くと、軽微な葉焼けを生じることがある。黒斑病に対する心配はなく、黒星病に対しても別に問題はなく、無袋栽培が十分可能である。

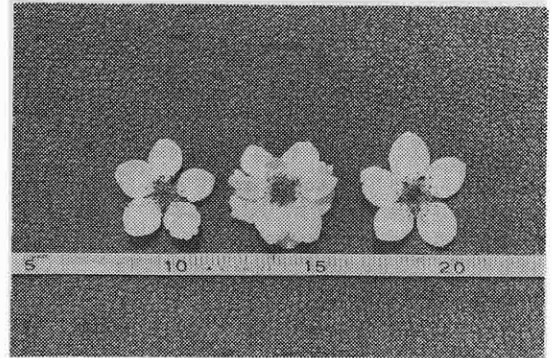
第2表 ‘多摩’ と他品種との特性比較

品種	樹勢	開花期		収穫期		1果平均重	果汁糖度
		始	終	始	終		
‘多摩’	やや強	月日	月日	月日	月日	g	度
		4.16	4.23	8.13	8.31	288.4	12.3
		4.12	4.22	8.8	8.25	264.0	12.4
新水	やや強	4.13	4.24	8.18	8.23	205.0	12.7
		4.6	4.20	8.10	8.15	218.2	12.9
幸水	中	4.15	4.25	8.27	9.1	223.3	12.6
		4.15	4.22	8.21	8.26	233.5	12.6
新世紀	中	4.11	4.21	9.3	9.11	268.5	10.7
		4.5	4.18	8.31	9.2	314.7	10.6
長十郎	中	4.12	4.22	9.2	9.23	277.3	11.7
		4.6	4.19	8.28	9.20	275.3	11.8
二十世紀	強	4.13	4.23	9.8	9.21	261.2	10.8
		4.7	4.20	9.2	9.21	267.4	10.9
豊水	強	4.13	4.23	9.14	9.17	313.6	12.6
		4.8	4.19	9.6	9.11	314.5	13.2

(注) 上段1971年 下段1972年の成績

(2) 結実性 開花期は二十世紀より2~3日おそく、幸水とほぼ同時期である。(第2表)花は白色単弁であるが、ときに重弁も混じる。(第1図)開花はおそいがすぐ満開になるので、他品種と花粉の交換に困るというようなことはない。新水、幸水とは不親和であるが、長十郎、二十世紀、豊水等とは良く親和する。(第3表)花粉は豊富で結実性は良好である。

第2図 ‘多摩’の花



重弁と単弁が混在する

第3表 ‘多摩’の交配親和性(1971)

交配組合せ	交配花数	結実果数	結実率
長十郎×‘多摩’	19個	19個	100%
二十世紀× 〃	28	28	100
豊水× 〃	11	11	100
新水× 〃	14	1	7.1
幸水× 〃	16	1	6.3
‘多摩’×長十郎	14	14	100
‘多摩’×二十世紀	13	13	100

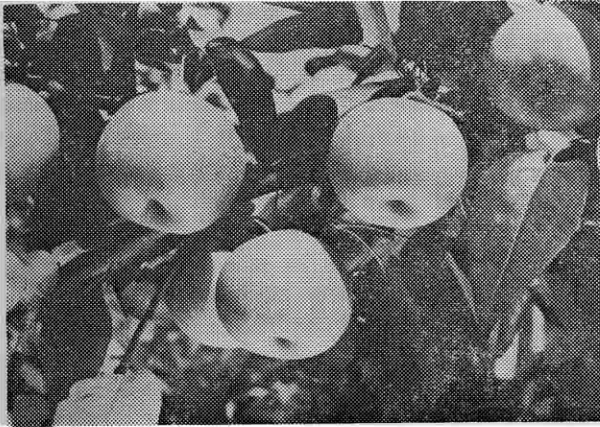
(3) 果実 果型は整った腰高の扁円で、帯窪はやや広く深い。玉揃いは良好である。肥培管理に少し注意を払えば、300g程度の果実を揃えることは容易である。1972年度に東京都下の園で高接樹に結実したものは、栽培条件も良好であったが、ほとんどが400g程度に発育した。黒皮は中間色で、成熟すると黄褐色を呈する。無袋の場合には赤褐色となる。小袋を使用し、その上にワックスとハトロンの2重袋をかけると果皮が黄緑色となり、ほとんど青ナシ状の外観を呈する。この場合には熟期は少し促進されるが、果型がやや小さくなる傾向がある。肉梗は生じない。

果肉は白色、肉質は緻密で軟かく多汁で酸味は少なく、検糖計示度は12~13度に達する。幸水の血をうけているだけに食味は優良である。

果実の成熟期はふつう8月上旬中甸であるが下旬まで採収を続けることも可能で、収穫期の幅がかなり広い。この点は本種の特徴のひとつである。収穫終りは新水よりややおそくなり、幸水の前にはほぼ終了する。収穫の最盛期は、新水と同じかややおそい程度であるが、その年の気象条件によって若干の変動がある。

‘多摩’は果実が成熟期に達しても、落果しにくい性質をもっているので市場出荷の場合はもちろん、観光果樹園等にとり入れる際にも好都合である。果実の日もちは早生種としては良い方に属し、心腐れは全然発生しない。

第2図 ‘多摩’の結実状況



1972年8月11日撮影

3. 栽培上の注意

本種は最も高温乾燥の時期に成熟するので、保水力が強く土層の深い肥沃地を選んで栽培することが望ましい。灌水ができれば申し分ない。乾ばつ状態が長く続くと果実の発育が抑制され、肉質も硬さを増してくるので

注意を要する。

都下で最近とくに問題となっている梅雨時期の落葉はほとんど無く、またえそ斑点ウィルス病についても病徴非発現性品種なので、高接ぎ更新の際に好都合である。つまりこの病害の保毒樹に接いでも、‘多摩’には全然この症状が出ないわけである。しかしなるべく、無病台を選んで接ぐべきことはもちろんである。胴枯病も現在までのところ、ほとんど発生していない。ただし肉質の軟かい品種の通弊として、オナガ、ムクドリ等の被害を受けやすいので、無袋栽培の場合だけでなく、有袋の際にも防鳥袋や防鳥網を使用するなど、周到な対策が必要である。

4. 摘 要

- (1) 交配年次 1963年，初結実1968年，命名発表1971年
- (2) 交配組み合わせ 祇園×幸水
- (3) 樹性 樹勢強健で花芽の着生は容易，花粉は豊富で，新水，幸水とは交配不親和であるが，長十郎，二十世紀，豊水等とは親和する。耐病性は比較的強い。
- (4) 果実の特性 果皮は中間色，果実の大きさは中の大，肉質は緻密で多汁，検糖計示度12～13度，収穫期は8月上旬～下旬，日もちは早生種としては良好である。

参 考 文 献

1. 芦川孝三郎・ナシの新品種 ‘多摩’ について，東京都農業試験場研究速報（1971）：1—3
2. 芦川孝三郎・東京都農試育成のナシ新品種 ‘多摩’ について，農業技術27巻7号（1972）：313—314

ニホンナシ '多摩' の果実

